

<研究会報告>

第47回 例会報告

2002年6月15日(土)に、本会の第47回例会が筑波大学学校教育部において行われた。例会で行われた芳垣文子氏と田村真広氏の講演の要旨は、以下の通りである。

教育現場を取材して

芳垣文子*

「20代は黙っていても子どもが寄ってくる。30代は呼ばば来る。40代は呼ぶと逃げていく。50代は呼んでも反応がない。」

何年前か前、日本教師教育学会の公開研究会で、都内のある先生が話した言葉だ。

昨年秋、千葉県の教員採用について取材をした。小学校の先生の採用状況は、千葉県は昨年度あたりからかなり改善されているが、中・高校は依然として難関。何十倍、何百倍の厳しい状況が続いている。小学校でも、特に東葛地区と言われる柏・松戸あたりはしばらく若い先生を採っていないために、柏市では2000年度まで9年間新採用の先生がいなかった。

採用試験の内容がかなり昔とは変わっていることにも驚く。小学校では1次から学力検査のほかに集団面接と小論文が入る。2次で5分間の模擬授業を取り入れたり、集団討議を取り入れた。模擬授業は高校でも行われている。

教員採用についての連載はかなり反響があり、ある高校の先生がお便りをくれた。「高校や障害児学校は相変わらず採用難で、当分は改善されそうにない。」この先生は組合で臨時教職員問題で取り組んでおり、具体例を随分教えてくれた。先生ご自身が、7回目での合格。非常勤講師をやっていたとき、授業のない夏休みは給料がないことを知らなくて、大家さんに家賃を待ってもらったこともあるという。「それに、授業だけやって楽だと言われがちだが、授業以外で生徒に接することができないのはむしろマイナス。授業でしかった生徒を部活でフォローしたりできない」とも語っていた。

また、この4月、高校の教科書検定を取材する機会があった。実教出版の日本史Aの教科書に千葉県の私鉄・新京成電鉄が取り上げられていたのは意外だった。京成津田沼～松戸を結ぶ路線だが、くねくね曲がっており、車で直線道路を走ると何度も踏切にぶつかることで地元でも有名な鉄道である。もともと旧陸軍の軍用鉄道で、カーブでのスピード状況などが実験できるように曲がりくねっているという説が紹介され、日本の大陸進出の歴史にまで触れられていた。

こんなローカルな話題が、と驚いたが、身近な話題から「なぜ」「どうして」を考えることが新学習指導要領から組み込まれたことが顕著に表れた例である。

新聞の仕事を通して今一番強く感ずることは、ネット社会の発達の中でのメディアのあり方だ。速報性と情報量に関しては、新聞はインターネットにはかなわない。新聞という紙媒体が果たしてどこまで、いつまで残っているか、5年、10年先は分からない。

ではメディアとしてどこで勝負するか。それは「信頼性」ではないかと思っている。紙媒体にしろネット上にしろ、手段は変わったとしても、取材して情報を得るという作業自体は必ず必要で、なくなることはない。情報をいかに正確にしっかりと把握するか。ネット上の情報は玉石混漚だが、新聞はどんな短い記事でも取材、検証作業は欠かせない。

*朝日新聞柏支局

今後教育の現場でも、児童・生徒が氾濫する情報をいかに判断するか、「メディアリテラシー」が重要になってくると思う。その中で、社会科という教科の果たす役割はますます大きくなっていくのではないかと考えている。

教師をめざす学生たちの「学び」の成立について考える

—地域性を生かした社会科授業づくりの実践から—

田村真広*

北海道教育大学釧路校における2000年度の実践から報告をさせていただいた。

受講者100名を超える講義では緊張が強いられる。あからさまな妨害はないとしても、大学の講義ではサイレント・マジョリティが不気味な力を発揮しているからである。

初等社会科教育法では、講義の他に授業づくりと実演の班活動を取り入れていた。最初の実演について、「こんな授業じゃダメだ。田村先生は甘い。」という趣旨の批評を書いた3年生がいた。教育実習を終えての発言でもあり、背景を詮索してはみた。彼は講義で妨害行動をとっているわけではないが、たぶんこれ以後の受講を無意味とするだろう。そしてその空気は班活動を通じて全体に蔓延するだろう。「私」による公的領域の溶解である。あえて批評を匿名で「講義通信」に載せて討論を呼びかけた。反響は大きく、数度の紙上討議を通じてサイレント・マジョリティの拡大を防げただけでなく、「授業」への理解が深められ、私なりの気づきも含めて授業づくりと実演の趣旨が確認しあえた。

同時進行で社会科教育学専攻の2年生7名とともに取り組んだのが「北方四島の教材開発」であった。1年間をかけた研究の成果は、地域学習のためのガイドブック『遠い隣人—千島』にまとめて関係者に送付することができた。『北海道新聞』(2001年5月19日)には紹介記事が載るというオマケがついた。「近世の千島史」「領土問題」「21世紀の千島構想」という三つのサブテーマを束ねて、「北方領土学習」への新提案を行っている。

当初は北方四島だけを対象にしていたが、千島列島全体を「北太平洋文化交流圏」として視野に収めることになった。これは千島アイヌ史の研究者である川上淳氏や、北千島最北のシュムシュ島の元島民である別所氏との出会いがきっかけとなっている。千島アイヌが形づくってきた交易圏を日露が遮断するところから近代は始まる。このように独自の圏域と時代区分を設定できたのである。

領土問題では、元島民の榊湯鉄夫氏との交信、元漁民で拿捕された経験のある野氏との出会いを生かした。榊湯氏は水晶島に所有する土地の登記簿記載事項変更を求めて国を相手に訴訟を続けている。一審で勝訴、二審で敗訴と劇的な展開を遂げて、現在最高裁で審理が続いている。また偶然にも、野氏は学生のアパート先のコンビニ店長であった。野氏は安全操業協定締結の裏方で尽力した方だったのである。

21世紀の千島については、インフラ整備とビジネスチャンスが拡大しつつある現在の四島の状況を見ながら、各自が期待・希望を語り合うという座談会で閉めくくっている。

「公」と「私」の区別と関連を自覚化する局面で発生する「磁場」というものが、とりわけ教師をめざす学生たちの「学び」を成立させるカギになると考えてきた。そしてその局面をとらえ

*日本社会事業大学

るには, fragility(もろさ, 壊れやすさ)をキャッチするアンテナを立てることが必要だとも考えるようになった。「磁場」をとらえた学生たちは, 新たな出会いの中でもこれを発見する。「磁場」の重なりを発見することで, 現実には確実に動いているし, その動きに自分が乗ることで現実を揺さぶることだってありうることを実感する。納得にもとづいた「学び」であれば, 彼らは語り伝えたい言葉を探し当てるものである。地域とは「磁場」を伏在させている場所であり, 地域での「学び」とは動きつつある現実を発見しこれに乗ることである。